

Title	古野先生を偲ぶ
Author(s)	八木, 明
Citation	大阪公衆衛生. 54 p.23-p.23
Issue Date	1988-12
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83711
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

古野先生を偲ぶ

(財)大阪公衆衛生協会副会長 八木 明

「おう、来たか」…これは毎年大晦日、迎春準備の整った高槻日吉台のお宅に伺い、先生が温顔で迎えてくださった時のお言葉である。いま遺影を前にして、懐かしさがこみあげてくる。

古野先生は昭和33年大阪府衛生部長に着任され、その後公衆衛生研究所長、顧問を歴任された。その間、副会長として今村、梶原両会長を補佐し、58年からは会長として当協会の育成発展にご尽力をいただいた。

ある時期、古野大阪府衛生部長、広島大阪市衛生局長、大協堺市保健部長という時代があった。奇しくも3人は阪大同級生であり、当時の大阪の衛生行政ネットワークは極めて円滑で、我々も大いに奮い立った。さらに阪大の関教授を中心とする在阪5大学のご協力を得て協会の基礎づくりができたのである。

発足以来、当協会は日本公衆衛生学会を3回運営した。そして

第12回 (S.32) は今村荒男先生

第22回 (S.40) は梶原三郎先生

第43回 (S.59) は古野秀雄先生

が会長をつとめられた。それぞれの学会で新機軸を出し、好評を博したが、それもひとえに副会長あるいは会長としての古野先生の適切な指導によるものであった。

昭和57年、協会は保健文化賞受賞の栄に浴した。このときに、私は、命を受けて式典に参列し、さらに宮中に参内して天皇陛下からお言葉をいただきました。協会主催の受賞懇親会のときの梶原、古野両先生のお喜びの様子は、いまでも脳裏に焼きついている。

行政官としての先生は厳しい方であった。

「筋を通せ」「一步後退、二歩前進」などの教

訓は、枚挙にいとまがない。一つの思い出は、公害が大問題となってきた時、先生は府の公衛研に公害部をつくり、研究を始められた。



ありし日の古野先生(雪夫人と)

その後、府で公害行政が衛生部の手を離れた時、先生は「人体影響は衛生部に残るというが、これでは筋が通らない。公害に関する窓口は保健所であるべきだ」と主張された。今日、府の公害行政が環境保健部に統括されたのも、先生の見識の明を物語っている。

晩年は健康を害されたが、理事会、役員会、公衆衛生大会など、協会の行事には必ず出席された。しかし私にとって、親しくお話が伺えるのは、冒頭にのべたように、お宅に参上した時であった。師のごとく父のごとく、また先輩として、単刀直入にあるいはゆるやかに、様々のご助言をいただいた。

協会について先生は、

1. 会員の意識の向上
2. 行政との連携
3. 大学との協力体勢
4. もろもろの組織との協調
5. 府民への公衆衛生理念の浸透

ということを常に口にしておられた。

先生の御霊に感謝の意を捧げ、倍旧の努力をお約束しなければ、の念を深くする。

合 掌